

補説第六 傷病者・産婦・高齢者の被災証言

―臨時救療所における調査

関東大震災における罹災者の救療については、種々の施設における医療事業の総覧や細目が、幾つかの震災誌や救療誌のなかで論述され、個々の医師・看護婦による献身的な活動も若干報告されている。とはいえ、かくして救護された傷病者、産婦、高齢者等に係わって本人または介護者の証言はきわめてすくない。こうしたなかで震災時の救療所で綴られた幾多の診察調書は、罹災者個々人の艱苦や病状を伝えるものとしてとくに注目される。

一九二三年九月一日大震災火災が発生するや、東京都は市役所構内に大勢の避難者を収容するとともに救護班を組織し、二日以降池之端、大塚、青山に臨時救療所を設置した。これら救療所では避難する傷病者、妊婦、老人に応急の措置を施す一方、患者の罹災状況と病状・治療について聴き取り調書が作成された。こうした対処について池之端診療所の日誌にはつぎのような記述が見出される。「十月二十日 この日収容患者総数一〇七三人に及べり。これを当所における最大収容の日とす。その内訳次の如し。内科四九三人、外科三八三人、産科一九六人。課長の発議に従い、入院患者罹災状況調査部を設け、婦人事務員三名を置き、入院患者各自につきて震災時に於ける罹災及避難の状況を聴取し、記録を作るの用に当たらしむる。その調査事項方法等は単に所長の立案に

従うこととし、池之端のほか大塚簡易療養所に於ても同様に調査を開始せり。」①

これら膨大な調書のなかで池之端救療所から十一例、大塚救療所から四例、青山救療所から五例が選択され、翌々年刊行の『東京市震災衛生救療誌』に収録された。その大半は庶民たる患者当人または介護者から医療員が聴き書きしたものながら、いずれも相当の長文として壮絶・哀絶な記録である。作成の意図どおり大抵は救療所内の治療救護よりも、そこに至る被災と艱苦に関して委細であって、埋もれた貴重史料と言うべく、本稿ではそれから半数について各々全文を以下に記載する。

調書一 製材職人妻渡辺ついの証言（池之端臨時救療所）

罹災時住所 東京都神田区西福田町一番地

職業 木挽職 渡辺綱吉 妻 渡辺つい 三十二歳

- 一、入院時 大正十二年九月十六日
- 二、退院時 大正十二年十月二十六日
- 三、家族の関係 夫綱吉三三歳、長女きみよ六歳 二女みよ四歳、三女こまつ二歳、四女初生児
- 四、罹災及び避難の状況

私は大正六年の五月結婚しまして三人の女兒を持ち、木挽職をしてお店に勤め、貧しいながら仲良く暮ら

① 東京市衛生課編『東京市震災衛生救療誌』一九二五年。九四頁。

してまいりました。震災の時は夫は例のやうにお店に仕事に行つて不在で、長女と二女は昼食を終つて表に遊びにいで、私は臨月で三女とふたりで食事中でございました。不意に地の下からムクツと持ち上つて、グラグラしましたから「そら地震だ」と三女を抱へて門口へとびだそうとしましたが、入口で歩けなくなりまして座つてしまひました。箆笥の前まで行かうと思つても歩けませんし、余儀なく下駄箱の前に三女を抱えて屈している所へ二女が駈けて戻りましたから、また又傍へ置いて少しおちついてからお向の仕立屋の家へ逃げました。其時私の家は半潰れになりました。夫はどうせ稼業柄材木の下になつて潰れて死んだらうと思つています所へかけて帰つてくれましたから、喜んで親子夫婦五人が丸くなつてどうなる事かと思つてゐる所へ友達が駈けつけて来て「火事で大変だ、こうしてはいられない」と言つて、今出橋の高架線の下へ皆で家財運び出してくれましたして、私共はガードの下へ集つておりました。まだ火も遠かつたものですし、あんな事にはなろうとは思ひもありませんでしたから、夫はお店へ手伝いに行くと言つてかけて行つて仕舞いました。其中火事はダンダン拡がつて来て危なくとも荷物の事など思つていられませんし、友達も皆自分々々の家へ行つて仕舞いましたから、私は止むを得ず一人小さいのを背負ひ、二人の手を引いて人波に押されながら馬場先門の方へ逃げました。

もうその時は大変な群衆で東京中火の手が上つていますし、臨月の身をどうする事もできませんから、松の樹の下に子供三人つれて飲まず喰わず寝ずで一晩かがんでおりました。

翌二日の午後二時頃までぼんやり途方にくれておりましたが、お腹が冷えて張つて来ましたし、産婆さんから月始めと言われていて、いまにもしれない身体を、私が寝たら此三人の子がどうするだろうと、心配になりましたから、通りかかったお巡査さんに願ひましたら、市役所の中へつれて行つて頼んで下さいました。

そこではじめて私共は玄米のお握飯をたべさせて頂きました。さて安心して見ると、こんどは夫の事が心配になりました、どうか私共が此処に無事でいる事を知らせたいと思ひましたけれども、行衛が分からないのですし、私は字がかけませんから、役所の方に御願ひして私共の名前を門に張り出して頂いて、今日は来るか、今日は来るかと待てど暮らせど、音沙汰がありませんでしたから、一度旧宅の焼跡へさがしにやつて下さいと御願ひしましても、今にも知れない身体だからと、看護婦さん方が止めてやつて下さいません。私はせめて死んだのなら骨だけでも拾いたいと思つて、そつと裏門からぬけだしてヤウヤウ焼跡へ来ましたら、一面の焼原になつていて、どこか家の跡が判かりませんでした。幸い近所の方が灰かきに来ていたのに出会い、教えて貰つて来て見ましたら、建札があつて駒込の神明町の私の伯母の家へ立退いている、とかいてあるとの事でヤウヤウ安心しましたが、その身体で乗物はなし、とても行かれませんか、市役所まで戻りました。その時折よく市役所でお産をした方の御亭主が神明町へ行くと聞きましたから、大分はなれていました、むりに御願ひして伯母の家へ伝言して貰ひました。それは十五日の事でした。

十六日には自動車で私共は池之端救療所へ送られましたが、伝言を聞いて従兄がすぐ池之端へ来てくれました、夫綱吉は私共は皆死んだものと諦めて、越後へかえつてしまつたと申しました。

十七日には伯父が来てくれました、夫の許へ電報を打つてくれました。その電報が十九日に着いたそうですが、最初は信じられなかつたそうです。それでも半信半疑で二一日に出京してくれまして、池之端へ来ましたら、「お父ちゃん」と子供等がとびついたきり皆口がきけませんでした。それから夫が付添となつていてくれまして私も真から安心して二七日の朝女児を安産いたしました。それだけの苦勞も障りなく、子供も丸々肥えて乳も充分ありました。

忘れる事も出来ないその二日後の二九日の事でした。朝から皆様で皇后様が行啓あそばすとの話しをしたが、私共の身分で殊に罹災後の分焼二日目でしたから傍らで拝むのさえ勿体ないと毛布をかぶっておりまして、段々私の枕許へでになって、お付きの方が赤ん坊の顔を御覧に入れましたら、「大層太っている」とおっしゃって「いつ生まれたの」と御問ひになりましたから、「二七日です」と申し上げました。子供達を御覧になって「皆あなたの子ですか、幾人ありますか」とおっしゃいましたから、「この上が一人で四人でございます」と申し上げましたら、みよを御覧になって「いくつですか」と御尋ねになりました。みよは平常は非常に無口ではにかむ子でしたが、どうしたかすぐ左の指を四つ足して「四つ」とお答えしましたら、「おりこうだね」とおっしゃいました。私はあまりの有りがたさに涙が止めどもなく流れて来ましたら、「何か悲しいのか」とか「何か悲しい事があるのか」とおっしゃいましたが、ただ夢中で「ハイ、ありがとうございます」

陛下は五寸ばかり柄のついた眼鏡のようなもので赤ん坊をごらんになっていらっしやいました。この報知新聞に出ている写真がいつの間にか撮影されましたが、ちっとも知りませんでした。あとになって写真屋さんですか、新聞屋さんですか二三次写真を撮りに来られました。

私共の様な賤しい身分の者は陛下がこの辺を御通りになりましたも、前へ出て拝む事さえ出来ませんのに、親しくお言葉をかけて頂き、赤ん坊まで御ほめに預りまして、何という有りがたい幸福なことだろう、地震と火事で家財は皆失いましたが、それは稼げば出来るものですから、こんな時にも臨月でいたればこそ市役所のおせわにもなれまして、親子助けて頂きました上、皇后様の御言葉まで頂きましたから、ありがたくてうれしくてたまりません。記念の為に御ほめにあづかったまま、子供の名をみほめと付けました。どうか御

はじめにあづかった様に育てたいと思っております。

①

古来いかなる大地震にあつても罹災者数の比率は、男女ほぼ半ばするはずである。しかし、女性による震災記録は少数しか遺されていない。史料の豊富さで知られる一七五五年リスボン大地震の場合には、震災の記録や報告がおそらく数百に達するが、女性の証言と確認できるのはわずか三例にすぎない。すなわち、ポルトガル王妃マリアナ・ヴィトリアのスペイン王室宛至急便、アトウギア伯爵夫人マリアナ・ベルナルダ・タヴォラの『回想録』、アイルランド人修道女カザリーヌ・ウィザムの実家宛書翰であつて、これらに国務尚書カルヴァリヨ・ド・メロ（ポンバル侯爵）の夫人レオノーレ・エルネスチヌ・ダウンヤリビエラ王宮に仕えるある女官からの聴き書き等を加えるのみである。②

こうした脈絡のなかで救療所での調書について注目すべき特徴のひとつは、女性による証言の多さである。すなわち『衛生救療誌』に収録される調書二十例のうち、渡辺ついの回想を筆頭として女によるもの十一例に及び、しかもうち三例が出産前後にあつた被災者の口述である。大正デモクラシーの一端とも云うべき女性の自立と社会進出を受けて、関東大震災については与謝野晶子、野上弥生子、平塚雷鳥など文筆家の記録が数々遺され、雑

① 『東京市震災衛生救療誌』二六二―二六五頁。

② 拙稿「ブラガンサ王家の被災と王妃マリアナ・ヴィトリアの書翰」その他（『リスボン大地震一七五五年―近代ヨーロッパの社会的震撼』online）

誌『主婦之友』等には婦人記者の報告も多く掲載された。① 他方救療所で綴られた被災者の証言も一般庶民による稀有な史料と評価される。

調書二 会社員妻小泉のぶの証言

罹災時の住所 横浜市西戸部町一四六番地

会社員の妻 小泉のぶ 二五歳

一、家族の関係

夫小泉実（二五歳） 夫の母（六五歳） 夫の妹（二十歳） 本人と一家四人暮しにてのぶは臨月なり。九月二七日池之端救療所に於て分娩女児出産す。

3

一、罹災及避難の状況並に本救療所入院迄の経過

地震のためには家屋は僅か許り破損したに過ぎませんでしたが、妊娠中の事として非常な困難を感じ、近所の人達に助けられつつ漸く掃部山に避難する事を得ました。

この日六五歳になる老母は付近の懇意先に出掛け、妹は本牧なる御主人の家へ用達に行き、自分一人の処へこの震災故老母や妹や夫の身の上を案じられましたけれども、思うに任せず、ただ小さい胸を痛める許りでどうしようかしらと案じておりました処へ夫が馳せつけ来たり、続いて老母も来て皆無事なのを喜び合

① 北原糸子著『関東大震災の社会史』朝日新聞出版、二〇一一年。四二―五三頁。

ましたが、妹のことはまだ安心できず、さりとて之は急に尋ねる用もなく、止むを得ず一家のうち三人が掃部山に野宿する事五日に及びました。この間僅かに握り飯一個宛を恵まれた許りで、腹はペコペコになる、咽喉は乾いても水はなし、とてもこのまま此処に居ては生命が覚束ないと思っておりましたら、夫が何処から見付けて来たか、食パンの食いちらした様なものを少しと、握り飯を五つ六つ紙に包んで貰って来たので、漸く凌ぎをつけましたが、それでも人に見られぬ様に食べなければいけないので餓鬼の様な有様でした。然しいつまでもこうして居る訳にも行かず、詮方なくここで親子三人生別れの相談をすることになりました。夫の勤務先は全滅し、懷中には僅か許りの小遣いよりほか何の用意もなく、いっそ母親を神戸にある叔父の許へ預けて招来の方針を定めようとし、私は一時里方なる東京市下谷竹町二三番地の兄池田新太郎方へ帰って厄介になる事に相談一決して、六日の朝姑や夫と涙ながらの生き別れ。この時の老母の愚痴がいまだに耳に残っていて忘れる事ができません。初孫の顔が見たいと朝夕安産を神仏に祈って待っていたのに、思いがけなく僅かひと月かふた月の処へ来て別れ別れになり、無事に出産するやらせぬやら、こんな情けない別れをするとは何の因果かと。翌日船の中で母の死す事が、神ならぬ身の知る由もないが、ひとしお別れを惜みました。そして私は仕度もない夫と老婆を船端迄送って、あかぬ別れを惜しみつつ、夫に貰った僅かの小遣いと竹の杖を力に、焼けた東京の実家をさして、臨月のお腹を抱えてトボトボと上りまして、下谷竹町の実家の焼跡を探しました処、幸いに兄は牛込榎町の友人の処へ避難している事が判りましたので、その方へ行きまして兄妹会見は致しましたが、ながく此処に厄介にもなれませんでしたので、府下板橋区に僅かの知る辺がありますから、これへ頼んでせめて身二つになるまでと思いましたが、これも裕福な家ではなく、時節柄お世話は出来ないから帰ってくれ、と実にすげない断りに頼みの綱を失い、ここでひと思いに死んで

この苦悩を去らん、と決心をして此処をしほしほと出て、板橋停車場のベンチに腰を下ろして身の行末やなにやかやと不幸をかこちつつ、途方に暮れておりました処へ、来合わせた人達が色々の話をしているその中に、東京市の下谷池の端救療所入院で産婦を世話してくれとの事を聞きましたから、私はすぐその人の処へ摺り寄って尋ねますと、いま新聞に左様な記事がありましたから、あなたもお困りならお出でなすって御覧ないかと云われて、すぐにまた牛込の兄の処へ引返してその話をして手続きをして貰い、此処で皆さんの厚いお世話になりました、こんな健康な嬰兒が生まれました。私は一人で嬉し涙に咽せぶと共にお上の厚いお情けを受けた事は永久に忘れる事が出来ません。

そして西三日前漸く夫からの便りが手に入りまして、それによりますと母親は船の中で死んだそうですが、いま思えば別れる時にあれ程心配していた母に、この子供の顔をひと目でもみせてやったらどんなに喜んだでしょう。全く残念で残念で仕方がありません。

一、将来の方針

夫が横浜で何かするか、あるいは神戸で勤めに入るか、いずれにしても夫の身が定まる迄自分は人仕事でもして生活を仕様と思っております。

①

詩人室生犀星は八月三十日駿河台の浜田病院を訪れ、出産第四日に妻子ともに健やかであることを祝した。翌

① 『東京市震災衛生救療誌』二六六―二六八頁。

日田端文士村の自宅で彼は地震に襲われ、その夕刻産院の焼失とふたりの行衛不明を告げられる。二日の早朝より上野公園へ搜索に赴き、美術館に避難する愛妻と新生児を見出した。① 二十余年後一九五六年に書かれた彼の自伝的小説『杏っ子』によれば、産院が激震で揺れたとき、看護婦が四つん這いになって赤児杏子を上から覆い、産婦りえ子は箒で身を支え、辛うじて立ち上がる。まもなく燃え始めた浜田病院や順天堂病院を背後に三十名余りの患者一団が脱出し、次第に各処へ分かれるなかで、赤児を背負う看護婦とともに、詩人の妻は湯島天神から上野公園へと辛苦して歩いた。② 他方救療所で作成されたこれら調書三例は、いずれも震災時における産婦自身の証言である。

調書三 牛乳店妻島田はなの証言（池之端臨時救療所）

罹災時住所 本所区吉岡町一番地

牛乳店島田敬太郎妻 島田はな 十九歳

一、入院年月日 大正十二年九月二二日

二、家族の関係 夫敬太郎二十九歳（行衛不明）長男寿太郎（死亡） 舅音太郎五二歳 姑いと五六歳
義妹みつ子十九歳 義弟末松十二歳 従妹島田きぬ子十二歳（死亡） 実母西村こと六二歳（死亡）

① 室生犀星「日」改造社編『大正地震火災誌』一九二四年。四四―四五頁。

② 『杏っ子』『室生犀星全集』新潮社、一九六〇年。第十巻、三〇―三八頁。

四、罹災及避難の状況

九月一日は私がお産をして一週間目でした。子供は名をつけたばかりで、私の母も来てくれましたから、私は安心して床に臥せて居りました。私は子供と母と三人で二階に居りました。第一震があまり大きかったので、逃げることも出来ずに居りましたが、だんだん揺れて来たので母は子供を抱いて腰のよろよろした私を引張って簞笥の側へつれて行きました。

階下にいた人達はもうみんな表へ出て、二階にいる私と母とを呼んでいました。やっと少し静まりましたので、三人で降りて行きました。近所の方も皆一緒に表へ戸板を並べてその上に座って居りました。

この時に近所の家は大抵潰れていましたが、私の家は幸い壁がおちた位で済みました。一同喜んでいましたが、揺りかえしがくるというので、私と母と子供と三人若宮公園へ逃げました。この時荷物は竹内金庫店の側の原へ運んでいました。一旦逃げた私達は公園に火が付いたので、また家へ引返しました。そして今度は荷物と同じ所へ行きましたが、その時はもう三方から火の手が上って荷物などかまって居られません。あれもこれとも思うには思いましたが、命を全うする為にはみんな置き去りにして堅川の石置場へ避難しました。

この時は私と母と寿太郎とみぬ子と若い者と五人で、あとの人達はみんな一緒に月島の方へ逃げました。私達は石置場へ来ましたが、私が御産上りで冷えてはいけなと、側にいた方からふとんをかりて敷いてくれました。

こうしている間に火はだんだん近付いて近所は燃え出し、河の中の船も燃えながら流れて行くというありさまになりました。火の粉が花火の落ちて来るようにバラバラ散って来ました。もう命があぶなくなってきましたから、蒲団を河水でぬらして、知っているものも知らぬひとも皆一団になって濡蒲団を被りて火の粉

を避けていましたが、力のあるものはどんどん押して来て、寿太郎がとうとう押殺されて仕舞いました。

たった一枚の蒲団を多勢で引張っていました為、私達は外へはみだしてしまい、火の粉を浴びました。早く河の中へでもはいらなければ危いと思って、死んだ寿太郎を抱いた母は二三歩あるいてすぐすわって仕舞いました。この時みね子が「姉ちゃん、引張って頂戴！姉ちゃん姉ちゃん」と叫ぶ声が聞えましたが、自分が危険でどうすることも出来ません。助けてやりたいのは山々ですが、そのまま河に入って仕舞いました。

河の中はもう一杯の人で身動きも出来ません。多くの人は皆河の中に入って、陸にいる人は火に包まれ、物凄い悲鳴を挙げつつ焼け死んで行きました。もう悲鳴もだんだん小さくなった頃、こんどは河の水が満潮のように急に増して来ました。最初は膝の辺でしたが、腰、胸、頭と今にも沈んで仕舞いそうになりました。

そのとき私は助からないものとあきらめて水のふえるまま、いったん沈んで仕舞いましたが、水のなかで「それでも助かるものなら、助かってみよう。どうかして助からないものか」と思いかえし、生命が惜しくなつて、一刻も早く水面に浮びたいと、下手ながら少しづつ泳ぎました。何しろ一寸手を伸ばせば、人につかえて、どんな泳ぎの上手な人でもこれでは泳げません。私は鬼の様な心になって、川底に重なった死体の上に足をのせてグット勢よく膝を延ばしたら、幸い頭から上が水の上に出ました。そのうれしかった事と言ったらもう助かった様な気がしましたが、まもなくまたズブズブ沈んでしまったから、また同じ方法で浮き上りました。こんな事を三四度くりかえした。いま考えるところおかしいんですが、その時は全く夢中で恥も何も構わず、一晩中河の中を冷えてぶるぶる慄えながら陸へ上った時には、また少し石の上を煙が這っていました。

陸の方も死人がゴロゴロして、生きている人は三十人位しかありませんでした。それから母のいた所へ往

って見ましたら、子供はそれ程焦げるい wasn't でしたが、母は帯も燃えきれ、足などが真黒に焦げていました。側にきぬ子がいました。実に惨たらしい最後でした。私はあまり冷えたため、腰が立たないで這って歩きました。眼も見えなくなつて死体にばかりぶつかっていました。その時向側の金物屋の小母さんの声がしましたから、私は声をたよりにその側へ行きました。そして一緒に居ましたが、今日もここに居なければならぬだろうと云ふので、がっかりしていましたら、幸い亀戸の義弟が探しに来てくれました。直ぐ目を洗つたり口を洗つたりしてくれましたが、まだ充分に目は明けられませんでした。負さつて船へ乗せて貰い、一晩明かしましたが、苦しい長い夜でございました。三日目の朝はじめて亀戸の方へ着きました。その時もまだ目は見えないし、歩行く事も出来ないし、物も言えませんでした。家の人達も私共と別に逃げた人は皆助かっていましたが、私の主人だけは私共の跡を追つて石置場へ来て、私と同じ様に子供をつれた婦人を助けてやつていたそうですが、未だに行衛不明です。

私も亀戸へ来て早速或る医者に頼みましたが、遠くて往診は駄目だと断られました。それから小学校の焼跡の病院へ行き、治療を受けて九月二二日に池之端へ入院させて頂きました。お陰様でモウ咳嗽の方も身体の方も治りました。ただ血脚気で脚が立ちませんので、困っています。足さえ治りますれば、ひとまず亀戸へ行こうと思っています。

五、前途の方針

亀戸水神森三三〇六島田正次方へ行き、今後の事を相談する事になっております。

①

このように『東京市震災衛生救療誌』に収録される証言が、いずれも社会的弱者としての立場や女性としての繊細な心情を感知させることは勿論である。独身である清元師匠杵屋かつは、寄る辺を求めて横浜から上野まで転々とさまい、中風の骨董商飯田忠五郎とかれをひとり介護する妻うたは、周囲の人達に補佐されて被災から脱出し、救療所において再会を果たした。

調書四 清元師匠杵屋かつの証言（池之端臨時救療所）

罹災時の住所 横浜市花咲町六丁目七八番地

清元師匠杵屋かつ女事 佐野かつ 四八歳

一、家族の關係 独身

二、罹災及び避難の状況並に池之端救療所入院迄の経過
両親には早く分れ、兄弟もなし、身寄りも無し。一人ぼっちで永の年月師匠さんと云われて、多く弟子を持って、気楽に身すき世すきに年月を過して来ました。若い頃にはお話しする人もありましたが、師匠で世を渡る身は、浮気の心を持つては弟子や世間の信用にもかかる事として、一層身の行いを謹んで、相当の信用

も受け、何不自由なく暮らしていましたが、今回の大地震で家が潰れる、まもなく火事になって家は焼けて仕舞い、どうする事も出来ず、偶々出入り先の旦那方を尋ねようと思っても、皆焼け出されて行衛も判らず、東京にも相当知る辺の人もあるのを、差し詰め牛込区弁天町の芥川湖十郎と云ふ人を尋ねました処、折角お尋ね下さったけれども、当地も御覧の通りの状態で食糧は不足するし、とてもお世話する事は出来ません、とすげなく断られ、それから二三の知辺を便りましたが、何処へ行っても、お気の毒ですがこの有様でとてもお世話ができませんと、すこぶる冷淡に断られて、途方にくれました。実に千古未曾有の出来事と云いながら、なんとという情けない世の中になったものであるうか、昨日迄はお互に美しい交際をしていた人が、今日は地獄の鬼の様に変わりましたので、頼みの綱も切れて、つらつら世のあぢきなさをかこりました。諺にもある通り、落ちぶれて袖に涙のかかる時、人の心の真ぞ知らるる、とはまったく千古不磨の言であると悟りました。もう乞食するとも人をたよるまい、なに身ひとつある、その上に腕には相当覚えもあり、病気さえ全快すれば、なにも苦労はないから人を力にする必要はないと、自ら心を励ましてはみたものの、この病気は所詮どうする事もならず、いつそのたれ死にする迄も、いま一人知る辺の人を頼ってみると、また弱い心を起して府下大崎一三九番地なる黒田安と云ふ人を尋ねたところ、非常に気の毒がって厚いお世話をしてくれましたので、地獄で仏に逢った程嬉しく思いました。その黒田様が色々心配して下さい、遂にこちらに御厄介になる様になりました。誠に有難い事に思っております。只今は他に頼る処もない独身の心細い者

で、前途の方針など考えがつきません。

①

調書五 骨董商飯田忠五郎の妻うたの証言（大塚臨時救療所）

罹災地 神田区旭町十五番地

職業 唐物屋

入院患者姓名 飯田忠五郎 六十歳

一、入院年月日 大正十二年九月六日青山救療所入院 同年十一月二五日大塚救療所転院

二、家族 妻うた

三、罹災及避難の状況並に大塚救療所迄の経過

妻うたの話

一人の倅は浅草区田原町の方に店を持っておりますので、中風の主人と二人暮しで御座いました処へ、あの九月一日の大地震に遭遇いたしました。

はっと致しましたが、いま私が騒ぎ立てると、病人が余計気をいらだてると思ひ返し、平気な顔を致しておりましたが、心の中たら全くお話しにならない程心配致しました。齡はとっていても、あの大きな身体の病人を連れて、どうして私が逃れられましょう。とやかく思索していましたが、もう愚図愚図している場

合でないと思ひまして、病人には知れない様に仏壇から、阿弥陀様のお像と過去帳と、仏になった人々の写真とを一纏めして腰につけ、重要書類のしまつてある手文庫と二人分の下駄と座布団一枚と尿器、氷枕を一括して置いて、一丁程隔つた知り合いの家へ行つて荷車を借りて来ました。借りて帰つて来ましたが、それを外に置いて家へ入る訳にはいきません。もう荷車の奪い合いで大変なのですから。困り切つておりますと、向いの旦那が私を見ていてあげる、というので、家へ入りましたら、もう主人は恐ろしがつて店先の処まで躍り出ておりました。「あなた、決してお前さんを焼殺しはしないから、安心しておいで」と。それから蒲団を二三枚車の上に敷きましたが、さあどうして車へ乗せてよいか全く途方に暮れました。その時私の家のもすこし先の家の二階に下宿して居なさる二人の書生さんが帰つていらしたので、御願ひですから、どうかこの人を車まで運んで下さい、つて頼みましたら、二人とも大変快く手伝つて下さいまして、漸く病人を車に乗せ、その傍の方に少しばかり手道具を積みました処へ、私の甥の様に思つております文ちゃんというのが、息せき切つて馳せつけて来て、もう俺が居るから心配しないでくれ、つて言つてくれました時の嬉しさ！有難さ！これは決して人間事ではない、神仏の御加護に依るものとヒシヒシ感じました。

その中に方々火事になりましたので、もうこの上は丸の内に逃げるより他ないと思ひ、病人も立つて、宮城の近くへ行けば大丈夫だと申しますので、漸く新常盤橋を渡りますと、もうその時の混雑はとてもお話しになりませんでした。神田の区域さえ出れば大丈夫だと思ひましたので、病人を車からおろし、お向えの家で子供さんやお老人があるのに、荷物が出されなくて困つていらしたから、その車を持つていつてあげて下さい、つて書生さんに頼みました。文ちゃんも家の事も心配だから行つて見て来る、つて言いますから、いまお前に行かれては全く私はどうにも仕様がなから後生だから居ておくれと申しますと、なにこんな小父

さんをどうして放り捨てて置かれるものか、すぐ歸つて来るよつて、駆け出しました。その中に火の粉が益々落ちて来ますので、手拭いに氷枕の水を出してひたし、それを被つております中に、日本橋の小谷の小僧さんが高帳提灯と御飯櫃とを預かつてくれ、つて置いて行きました。文ちゃんが歸つて来て、ここはどうも危ないから小父さんだけはもつと安全な場所へ移すから、小母さん待つてておくれ、つて病人を紐で背負つて行きました。私は離れまいと思ひましたが、荷物は持ち切れず、他人様の預り物もあるから、やたらに動けません。その中に蒲団に火がつきまして、始めの中は氷枕の水で消しておりましたが、消し切れなくなりました。いよいよここに立つていても仕様がなから、主人の跡を追いかけてみようとなりましたが、途中で通りが二つに岐れていて、どちらへ行つたか判りません。そこへ丁度来合わせた近所の知り合いの人が、私の話を聞いて、もう東京中の火事でどこへなんとも仕様がなから、まあ今夜は休みましょう、と云ふのでそれもそうだと思ひまして、和田倉門の中に入つて二十五六人が一団になつてゐる処に入れて貰ひましたが、そのときすっかり主人の座布団を抱えて土の上に座つており、他方の方に注意されて漸くそれを敷いた程、自分では気がしつかりしたつもりで居りましたが、抜けて居りましたのですね。兎に角主人を焼き殺さずに家を出ました事は何より難いことでした。そこで神様に御礼やお願ひを心の中で繰り返しながら、一夜を明かしました。二日に桜田門の方へ歩いて出ましたら、神田の方の避難者が続々と丸の内へ来ますので、知つた人に随分沢山会いましたが、だれも主人を見かけたという方がありませんでした。

その中に知り合いの家の小僧さんに逢いました処、その小僧さんは、お嬢さんも手文庫を一つ預かつたが、皆にはぐれて途方に暮れたと申します。その子に御飯を食べさせて、済まないが銀座はどんな様子だか、また汽車や電車の便はどんなだか、見てきてくれないかと頼みますと、自転車を持つてゐるのですぐに歸つて

来まして、もう銀座も日本橋もありませぬ、本所深川あたりは皆死んで、汽車も電車も動かず、ただ僅かに方々の救護班の自動車が動いているというので、それはそれで浦和に行く方向までも送って貰いたいと、東京駅の所で待ちましたが乗られず、その日も和田倉門の中にて休み、三日目に赤坂の親戚の所へ行きました。その間始終お爺さんの事を考えますと、堪らなくりますが、もうこうなっては私達の力でどうする事も出来ません。お頼みするより他なしと思ひまして、心の中で神様を念じておりました。六日目にひとまず浦和の親戚へ行きましよう、漸次路をとって上野駅の前まで来ますと、バツタリ息子に出会いました。その時の氣持、私は幾度も夢でないかと頭を振ってみました。まあ嬉しくて涙さえ出ませんでした。漸くいま私を探しに丸の内へ行こう、と思つて出てきたのだという話なんです。私もすっかり焼け出されて上野の美術館に居るので、それからずっと美術館に居りましたが、私の親戚知人の大方は無事でしただに、ただ主人の行衛だけが案じられます。丁度子供の様に疲れてはウトウトと眠りましても、種々の事を思い出して一寸目が覚めると、もう眠り就かれません。兎に角あして無事に家から運び出したのだから、焼き殺さなかつたのだけが私の慰めであり、また天道様に対しても御申訳が立つ次第だ、これ以上路傍で看護人なく死んでも、これと思ひ召しであるかも知れない、とまた思ひ返しておりました。その間には新聞紙にも広告を出しましたが、何の手答えもなく、きつともう口も利けなくなつたのではあるまいか、文さんに背負つて行つては貰つたが、粗漏でもして不潔だから捨てられたのではあるまいか、と毎日々々そんな事ばかり考えておりました。

こうして幾日となく過ぎて、九月の三十日でした。玉川の姪の所から、叔父さんはいま渋谷の実践病院へ収容されている、と云ふハガキが来たから、つて通知を寄越しました。それから直ぐ会いに行こうと思ひま

したが、みんな揃つて行くと、先ずよかつた！と安心させると、その儘になる恐れがあるから、今日は私一人行つて様子を見てこようと、それからたった一人で渋谷の停留場へ行きまして、交番で病院の所在を尋ね様としますと、人が十人も十五人も並んで、方々を尋ねております。いつになったら路を聞かれるか判りませんし、氣は急ぐのでつい一人一人でガードの下まで来ますと、私の子供同様にしていた若い者に会いまして、お互いの無事を喜び、私がお爺さんの話をしますと、それじゃ一緒に探そう、つて先ず青山学院に行きました。が、いまも飯田忠五郎さんを探すがこられました。が、当方には居りませんと云われ、それからなんとか教会とか警視庁の救護班とか地方から来た救護所とかを一つ残らず聞いて歩きましたが、どこへ往つても、いまその方を探ねる方がいらしたが、その様な病人は居りません、と仰言います。最後に青山の教習所へ尋ねました所、丁度目の前に寝ていました。私は思わず、大声出して仕舞いました。けれども病人は氣付かなかつたらしいです。それから枕許へ寄りまして、頭から「泣いちゃんなんにも話さないし、お前さんの話も聞かない。みんな無事で傷一つ負わなければ、安心して仕舞っちゃいけないよ」つて強く言いました。傍らに居らした方達はどんなにびっくりなすつたでしょう。その日は附いていないほうが良いと思ひまして、心細がる病人を一人残して私は上野へ帰りました。私達の先を先を探したのは千駄木町に居る甥でした。

上野へ帰りはしましたが、すっかり安心したのと疲れが出て、遂々三日間寝て仕舞いまして、付添いとしてえ私が青山救護所へ行きましたのは一〇月の四五日頃で御座います。その中に病人を背負つて逃げてくれた文ちゃんというのに会つて話を聞きますと、東京駅へ寝かして置いて、家の様子を見たりしていましたが、六日に兵隊さんが来て、病人を自動車に乗せて青山の病院へ送つて下さつたのを見て、それから時々病院へも行つたが、病人に会うともう嬉しがって、帰すのを大変いやがり、子供の様に傍に居てくれつて

云ふが、何分自分は働かなければ女房や子供を食べさせられない身の上ですから、仕事の帰りにどうか都合してはお医者様や係の方に容態をお尋ねしては、遠くから姿を見て帰ったそうです。

少々義理悪く家を出たり、財産を失ったりした子でしたが、今度の命を投げ出して主人の世話をしてくださいました事は、全くなんと感謝してよいか判りません。この上の罪滅ぼしが御座いなくしょうか？いまは全く真面目に働いております。病人は東京駅へ引きずり込まれた時、骨盤の上と膝と踵の上を摺りむき、手当てが行届かなかつた為、すっかり化膿しましたのを、皆さんで親切に手当をして下さいまして、私が尋ねました時は、もう殆ど癒っておりました。包帯を取り替えるのさえ容易な事では御座いませぬのに、始めのうちは青年団が在郷軍人かなんでも男の方が手当をして下さいまして、大分秩序が立つてから看護婦さんが見て下さいましたそうです。私の主人は自分の用さえ達せない病人ですから、きつと隅の方に厄介者扱いを受けていたのだらうと思っておりますのに、あの混雑の中にこんな親切にして頂き、その上単衣も二三枚着替えて持っておりました程、行き届いた介護を受けていたのかと思いますと、うれしくて、有り難くて、勿体なくて、涙ばかり流れました。到底看護婦さんの真似は出来ませんが、私に出来ます事なら何でもさせて頂きたい。洗濯物のお手伝いでも、片付け物でも私の手に適う事をさせて頂いております。よく看護婦さんがまたおばさんは何をこそそしていらっしゃるの、って申されますから、これは私の道楽なんだから、捨て置いて下さい、って申しました。看護婦さん達の親切な事したら、本当に有り難く涙がこぼれました。

主人の隣の毛布にくるまっていた人が逝くなられた時などは、それは丁寧に始末されたので、自分もこんなに郑重にされるのならば、このまま此処で瞑目しても、残り惜しくないと思ったそうですが、どうか家の者に一目でも会いたい、田舎の親戚へ便りがしたいと思ったが、葉書一枚ないのを知らされず、多摩の親戚

へ出したのは、慰問袋に二枚入っていたのを投函して頂いたそうです。あれほどヤッパリばけておりましたので御座いますね。事務の方にも看護婦さんにも、一枚拝借して葉書一枚呉れさえすれば、こんなに心配せず、また幾分皆様の御手間も省けたでしょうに。

いま直ぐどうという病気でもありませんし、また癒る見込があるわけでもありませんから、いつまでもベンと御厄介になっておりますのは大変心苦しいのですが、なにぶんいま倅はバラックの四畳半に二夫婦と子供ひとりずつの六人暮らしておりますので、その上一日中寝ていなければならぬ病人を連れては帰られず、厚かましく御厄介になっております。此処に置いて頂きますれば、まさかの場合はお医者さまに診てもらえますし、親切な看護婦が居て下さいますから、私達に取りましては、地震や火事は本当に有り難い事であったので御座います。

五、既往症並びに現在の疾病状況予後等

大正十一年十月二二日午後三時外出中発病左半身不随現在半身不随歩行不能、硬脈、予後全治の見込なしといえども生命に就いては尚ほ再発作にあらざれば断ずるに由なし。

六、病名 脳溢血

①

臨時救療所に収容された傷病者は、震火災の惨禍が甚大であった下町の住民、本所深川一帯の商工業者が多数

を占めた。なかでも三万人から四万人の死者に至る被服廠跡の大惨事については、奇蹟的な生存者の証言が女性の口述を含め九例も含まれる。両国国技館近くの本所横網町には陸軍省被服廠が位置していた。大正十一年この建物は東京市等に払い下げられ、二万四百四坪の敷地では公園や学校の建設に向けて準備が始まっていた。

地震発生の翌月刊行された東京朝日新聞社編『関東大震災記』には各区の震火として本所区における罹災、なかでも被服廠跡の地獄絵がつぎのように記録される。「大地震とともに若宮町と森下町から発火、火焰は向島を煽り、全区たちまち火の海と化した。避難民は漸次各公園地内より火に追われて電車道を亀沢町被服廠跡に集った。深川区民も追詰められて同じ被服廠跡に集まり、廠内五町の広場は幾万とも数知れぬ避難民と荷物で充滿した。それでも猛火に逐われて、ほかに避くべき所もないので、相生警察署長山内秀一氏は部下を督し声を囁らして、同廠内へ避難すべきことを告げたが、午後四時頃猛火のために凄じい旋風が巻き起り、悪魔の如き唸りを立てて、幾万の避難者を抱擁せる廠内へ大火焰は舞い下り、人と荷物を一舐めにした。断末魔の叫びが関の声の如く場内に響き渡る。木材も車も家財も人も火のかたまりとなって、物凄い旋風のため宙に舞い飛び、真の修羅場を現出した。かかる際にあつても生きんとする人間の努力は恐ろしい。場内の中央部にあつた僅かばかりの水溜のなかに全身を浸し蒲団をかぶり、または折重なつた人の下積みとなつて、九死に一生を得た者が二百名ばかりあつた。恐ろしい旋風と火焰の舞踏は夜の八時頃に至つて漸く鎮静したが、あわれ三万二五六〇有余の生霊は累々たる死体となつて酷らしくソコに残された。今回の震災中この廠内ほど悲惨な光景を現出したところはなからう。」①

① 東京朝日新聞社編『関東大震災記』（朝日新聞付録）一九二三年。七頁。

調書六 屋根職人金子蔵吉の証言（池之端臨時救療所）

罹災地 本所区北二葉町二八番地

職業 屋根屋

入院患者姓名 金子蔵吉 （六七歳）

入院月日 大正十二年九月十三日

私の家は前の室を姉娘夫婦に貸して奥間は三人目の娘夫婦に貸して食糧を貰い、そして時々は屋根屋に出たりしておりました。地震の時は皆んな家に居たんです。ソラ地震だたつて云ふと、家がグラグラ大浪の様に揺るので、直ぐ表へ飛び出して、ソウラ逃げろと、何もかまわず被服廠へ逃込みました。この時は私と妹娘と婿と三人で、婿はひと行李担いで来たから、それを置いて「もうひとつ持ってくるから、荷を盗られない様に番をしていてくれ」と云ふて出掛けました。そのあとへ人が集まること集まること、どうしてこんなに集つたのかと不思議な位でした。そしてもうキッシリの人で身動きもならない位になつたら、バラバラ大きな音がして、火の粉が雨の様に落ちて来たのです。そうしますと、どういう訳でしょう。他の方から水がジメジメ湧いて来て、どうして良いのか判りません。みんな腹這いになって、丁度刺身のような具合に重なり合っていました。もう到底命はないものと覚悟していました。このとき側に婿が帰つて来たのも知らずにいましたら、「お爺さん、そんな所に居ると死んでしまう。早く此方へいらっしゃい」と手を引いて呉れましたが、後の人がしつかり私を捕まえていて、抜けられないのです。それでもやつと婿が引張り出して呉

れて、人の背中を渡って命からがら裏の方へ逃げました。あの時の物凄さはとても口では云えませんが、何しろ実に怖ろしくて地獄の沙汰かと思いました。どうやらこうやらして裏へ抜けられたので、やれひと安心といっぱく仕様と思ったら、周りがいっぱい死んで、漸々生き残った者は、フウフウヒューヒューとまあ虫の音に及ばない様な小さな声を出して、私も思わず身震いして婿の引張るままに安田銀行の方へ逃げました。もう疲れきれて仕舞ったので、いっぱく疲れてする中、休もうと思つて婿に話したら「お爺さん、なにを云っているんだ。いま電氣柱へ火が移った処だ。愚図愚図している、また命が危い。煙草なんか明日でも明後日でもゆっくり喫めるじゃないの」とまた怒られて、サッポロビールの側を通つて向島へ行こうと思つたら、もう橋が落ちて仕舞つて、また引返して別の橋へ行ったら、これもまた落つて無い、と云ふのを目当てもなく逃げました。途中私は知らないけれど、婿の知った人に遇つてそこで一晚野宿しました。ここは農家で、潰れなかったのですが、地震で家の中で寝られなかったのです。

翌日に、いつ迄世話になることも出来ない、また当もなく出掛けましたら、また婿の知った人に会つて「向島の小学校で手当をして呉れるから行くが良い」と教えられて、やっとまあ火傷の包帯をして貰いました。そして知人が教えて呉れた通りに、道を尋ねながら電車の踏切りを通つて少し行きますと、五六件長屋があつて、その一番端の家がそうでした。そして一晚泊めて貰つて、翌る日になったら婿は王子へ行くと言つて、私と娘を置いて出て行きました。

私は婿が居なくなったのに、いつまでも居るのも悪いと思つたから、焼跡の方へ行こうと思つて、金を出して見たら、逃げる時参拾円あつたのが六円しか残っていないので、聞いてみたら婿が持つて行つたと云うから、その六円だけ貰つて「お前は今に婿が迎えに来るだろうからここに世話になっているがいい。己は焼

跡の方へ行くから、まさか迎えに来ない様な事はないだろう」といつてその家を出掛けました。私には他にまだ娘があるから、どうなったかしらべようと思つて焼跡へ行つたが、何の立札もないんです。仕方がないから、小村井の妙教寺へ行つて、いままでのお話をして、助けて呉れる様に頼んだ所、「そう云ふ話ならこういうところへ行くがよい」と教えて呉れましたので、何という所か知らずに行きました。一晚泊めてくれ、翌日馬車で牛込へ送られましたが、「火傷はここでは駄目だから、上野へ入れて貰うがよい」といつて、また自動車で此方へ来ました。

それが丁度九月十三日でした。

お陰様でもう火傷の方は大分よくなりましたら、今度は足がふるえて立たなくて、十月二日に内科の方へ廻つてきたのです。これから後の事つても、未だわからないです。外科に居た時に近所の人が、私でない誰かを尋ねて来たのに出会つたので、ここに居ることを娘に知らせくれ、と頼んだのですが、未だに来てくれません。

どうかして探して貰いたいものです。

①

調書七 料理店主中村利正の証言（池之端臨時救療所）

罹災時の住所 本所区長岡町四三番地

一、入院年月日 大正十二年十月二十二日

二、調査年月日 大正十二年十月二十九日

三、家族の關係 家族三名、内使用人二名焼死

四、罹災及び避難の状況

私は九月一日地震後直ちに被服廠跡へ避難致しました。その時は既に被服廠の空地には人と荷物で重なり合うばかりに混み合っておりました。その内何処からともなく巻き起って来たあの大旋風は付近に積まれてあった材木を、中空高く巻き上げたと思うと、彼方からも此方からも人間と云わず、荷物と云わず、石材と云わず、その勢は恰度ホンプのホースの筒先に向っている様な猛烈な勢で、ふっ飛ばされて来るので、その危険恐しさたらく、避難者各自は皆手を繋ぎ合って、地に這い臥し、旋風のために吹き上げられるのをふせぎました。然しあの旋風の勢は微々たる人間の力に屈する筈がありません。私共も臥すまま、地上から幾度となく吹き上げられました。昔から人礫^{つぶ}と云ふ事を申しますが、實際その通りの有様に、私は今考えて見ましてもぞっと致します。

右膝関節に五六箇所の大小打撲傷を受けておりますのは、その時材木が飛んで来て打った傷です。

とかくするうち四方よりしての猛烈なる火勢は益々物凄く、私共の頭上を荒れ狂い、その熱さ苦しさと云ったらほんとにどんなだったか判りません。私は幸いに一枚の蒲団を持って往きましたので、その蒲団を水溜りに浸しては頭からかぶり、また浸してはかぶりしていましたが、蒲団も被るか被らぬ内にチリチリ燃え出すので、愚図々々していたらそれこそ焼死しなければなりませんから、夢中になってこれを幾度となく繰

返しました。その間の時間はどの位の時間であったか判りませんが、段々火も風もおさまって、やっと焼死から免れたのでした。

風がおさまったかと思うと、何処からともなく万歳々と云ふ声が聞こえました。私はふと我に返って身体を起して見ますと、どうでしょう、周囲は死屍累々苦しんで苦しみ抜いて、遂に焼死した人々や、瀕死の界に苦しみおる人々が数え切れぬ程居て、その惨状は実に目もあてられませんでした。その山の如くある屍の中に生残った人々は立ち上がって、歓喜の万歳を唱えた事が判りました。私もその時自分が千辛万苦の中より免れて生残った者であると云ふ事を、強く覚らされる様な気が致しますと、何となく感極まって、思わず生残った人々と一緒になって声高に万歳を唱えて喜び合いました。

それから私は自分がほんとに死なずに生残っていると、初めてしっかり自覚する事が出来る様になると、さあ今度は喉が乾いて、こげつく様に居ても立っても居られなくなりました。するとそのとき警部さんが水を飲ませに来たと云ふのを聞きまして、私も飲みたいが一心にて、痛い足を引きながら行ってみますと、警部さんは「この水はここに倒れている多くの気の毒な断末場の火傷者達に末期の水としてやろうと思うので、君等の如き大した事もない人々には、いま直ぐこの後から持って来て上げ様から、少しの間我慢して呉れ」と叫んだので、水を目差して集まって来た少なくとも動ける程度の火傷を負う人達は、その言葉に思わず感激して、焼け付く様な喉を持つてる自分達の前に水を置かれながら、「そうです、もったもです！警部さん、そこに倒れてうなってる人に早く水をやってください」と、自分等の火傷や咽喉の乾く苦痛も忘れて、自らの瀕死人を捜し合うのでした。

警部は一度来たきり、二度と私達に水を持って来て呉れませんでした。私はもう堪らなくなつて、日は將

に暮れ様とする頃、私はやつの事で這って安田邸まで行って、庭前の池の水を貪る様に飲み、そしてその水で負傷した処をひたしました。後とで考えると、その池に死体が沢山あったのですが、そのときはそんな事は少しも気に懸りませんでした。それからまた這って築山の処迄行った時は、全身腫れ上って来ましたが、痛みより疲労の方が勝ってか、いつとはなしに、そこに寝て仕舞いました。

夜半頃でした。熱気やら身体の痛みやらで眼が覚めますと、丁度安田の倉庫が盛んに燃えていました。それが晝頃迄燃え続けておりましたが、その時はもう動く力も出ない程、体が疲れ切っておりました。夜が明けますと、人々の被服廠の方から泥にまみれた氷の塊を持って来て、池水で洗っているのを見ました。然し私は取りに行く事も出来ないのです、頼んでやつとそれを分けて貰って、体を冷しておりましたが、私はその氷で非常に助かりました。製氷会社の倉庫が亀沢町車庫のあたりにあったか、多分人々は其処から氷を掘り出して来たのでしょうか、被服廠で生残った者はその氷が、どんなに助けとなったか分かりません。なんでもそれが三日頃迄あったそうであります。

それから身体の自由のきく者は両国駅に行って、倉庫に積まれてあったさつと芋の焼残り物を担いでまいり、焼跡からは焼鍋の類をひろって来て、それで煮て、人々つつき合いました。

三日目に入ってからは大抵一日に一人につき一個あて位の握飯が貰えました。四日目には千葉県在の人々が救助に大勢来しました。その人達は私達生存者を見れば、「やあ貴方も大丈夫でしたか。よかったですね」と、縁もゆかりもない他人である私達を抱つかん許りに喜んで呉れて、「まだ外の方にも一人でも多く差上げたいからこれで我慢して下さい」と、持参した握飯のひとつの半分づつで呉れ合って下さったのには、嬉しくて全く感謝の涙がでました。

丁度その日頃からそう云ふ人々が沢山みえて、余程食料品は不自由になりました。焼死者の中には四日頃迄生き残った者が随分ありました。火傷負うていながら、大抵意識不明で唯々無意識に歩く許りであって、水！、水！と連呼し乍ら倒れて、一二時間後に息を引取った様な者は、四日頃でも沢山ありました。

三日の日赤羽の工兵隊の兵士が参りまして、一人に經節二本、鶏卵六個宛呉れましたが、向うでは配給品としてかなりの分量を予測し、持参したものの様で、いざ配給の段になって、生存者のあまりに少ないのに驚いた様子でありまして、その結果一人宛予定より多分に配給しても、なお余程余ったようでありました。

五、池之端救療所入院までの経過

四日目から宇都宮軍隊の手によって、担架を国技館焼跡の救護班に収容せられました。そこから今度は重傷の人から順次に三宅坂の東京衛戍病院に送院せられました。多人数の事でありますから、なかなか手が廻らず、私は七日迄国技館跡に居りました。衛戍病院には九月の二二日迄居りまして、そこから本救療所に送られました。

入院後の経過はあまりはかばかしくありませんけれども、近頃は自分の用だけは足す事が出来るようになりました。

六、今後の生活問題

全治後は再び戦災前の職業を開く予定でありまして、既にバラック建築に着手しております。①

吉村昭の名著『関東大震災』には被服廠跡の大火災について被災の経緯・大要が記述されるとともに、いくつかの証言が列挙され、なかでも近隣の住民山岡清真による長文の記録がほぼそのまま紹介される。①また、大正十三年刊行の改造社編『大正大震災火災誌』では、出版編集者小泉登美によって、文学的な表現を含む綿密な遭難記が綴られた。② 救療所でなされた調書数例も、これらに比肩する貴重な史料と考えられ、庶民の日常生活や人間関係をも彷彿とさせる。

調書八 電気局職員妻神田さとの証言 (青山臨時救療所)

罹災地 本所区南二葉町三丁目

職業 電気局本所出張所雇人

入院患者 神田そと(四四歳)

家族 長女きよ(十一歳) 次男利男(六歳)

行方不明 夫神田秀次(四九歳) 行方不明 長男実(十五歳)

夫は局の方にながいこと厄介になっていましたし、自分もメリヤスのボタン付けを内職にやっていたので

① 吉村昭著『関東大震災』文芸春秋、二〇〇四年。七七一―一〇八頁。

② 小泉登美「被服廠跡遭難の記」改造社編『大正大震災火災誌』、一九二四年。一三一―二二頁。

す。一日は夫は朝四時頃出て行きました。実は昼の間は高等工業の給仕をして、余暇に学校へ行っている様なわけで勿論まだ勤め先に居たのです。私は八月八日に亡くなった母の仏に水でもあげようと思って、汲みに行つて帰つて来たら、なんだか家が曲つていたので、どうしたのかと思いました。と外で遊んでいたきよが泣き声で、母ちゃん、地震だと云うので始めて判つた位でした。びっくりして直ぐ家へ飛びこむなり、蒲団を引張り出して子供にかぶせたり、自分もかぶったりするうちに、また大きなので家は大浪を喰つた様に揺れて、私達はもう死ぬ覚悟でした。

でも家は潰れず、二三度揺れてからやっと外へ出ました。もう隣あたりは目茶苦茶に潰れていましたので、隣の主人が家に居ては危い、潰れた家の屋根の上にいるのがよい、としきりに勧めてくれましたので、私もその気になって子供と二人で屋根に上りましたら、そのとき家は斜めに傾いて崩れました。そこで夫と実の帰るのを待っていました、なかなか帰って来ません。そのうちに火が盛んになって、どこかへ逃げなければ危くなって、裏の人がきよと利男とを割下水の通りへ先に連れて行ってくれました。私は二人が帰ってくる迄待っている積りで残りましたが、その中に車や人で表はギッシリ詰まって、私も子供許り先に逃がしたのが気になって、通りへ出て行きました。このとき行かなければ夫達にも会えたのですが、そうかと云つて子供の方が余計気になっていましたから。

右に押され左に押され、死ぬ苦しみでやっと子供の側へ行きましたが、もうそこからは家へ帰ることもどうならなくなつて、小使錢も持たずでした。人に押されて行くともなく被服廠まで来て仕舞い、右の正門から流れも込みました。この時近所の二三歳になるのと十五歳と十歳の三人の子供が親にはぐれて、私達について来ました。私は可哀想であつたので、一緒に連れて歩きました。およそ十間許り来た時あの龍巻に会っ

て私は直ぐ男の人に抱きついて、やっと吹き飛ばされずにすみましたが、きよと十歳になると二三歳になるのとはどこかへ吹き飛ばされて仕舞いました。やっと風が静まった時にはもう人が何人ともなく倒れていました。私は利男と一五歳になるのを連れて砂山へ上がりました。丁度その付近自動電話の箱が沢山おいてありましたので、私達はこれなら大丈夫だろうと思って、その中へ這入っていますと、またまた大きな風で皆将棋倒しに倒れて仕舞いました。それより先にもう被服廠にも火が著いていましたので、周囲が熱くて堪りません。その為に砂やとたんや瓦がどんどん飛んで来るので、一寸でも顔を上げたり立ったりすると、大変な傷どころか命も危い位でありますゆえ、皆な腹這いになって逃げ廻りました。

たまたま風の風いた時に頭を上げて見ると、それはそれは物凄いあたりの様子で、全く生きた空はありませんでした。頭の半分ない人や手足のもけた人や血だらけの人達が、自分の周囲にゴロゴロしているんです。なにしろ少し向うの方には真赤な火がべらべら這っています。私はたった一つ残っていた自動電話の箱の中に身を入れました。幸いに蒲団が入っていましたので、天の助けとそれをかぶって小さくなっていましたら、その端が外に出ていて、それに火が付いたからたまりません。また逃げました。

もう行く処がなくなつて、また砂山の方へ引き返して上つて、また引き返した処に何かを建てる為に縄張りがありました。運の悪い時はあんなもので、折角そこまで来たのにその縄に足をからめられて、立つては転び、転びしてそこで足に大きな怪我をして仕舞いました。その中にも火は近くまで来るので、四方八方火の海です。全く行く所がありません。その十七八の男の子が、うずくまって一心こめて天満宮を祈っていました。私もおすがりして思つて子供を抱きしめ、自分はその子の膝に頭を突込んで祈り上げていました。暫くして自分達はもう死んだものと思つていましたら、五身が動くので頭を上げて見ましたら、まあ

周囲は死人を敷き詰めた様で、一杯ならんでいるじゃありませんか。怖ろしさに氣を失つて仕舞いました。

きっと夜中でしたろう。私の側へきよが来て、母ちゃんと泣きながら叫びましたが、生きている筈がない、幽霊だと思つたので黙っていました。それでもあまり声が似ているので、きよちゃんかい、お前ほんとのきよちゃんかい？生きていたのかい、と何度も何度も聞きました。すると確かな声で、生きていたよ、母ちゃんも生きていたのかと泣き出したので、やっと安心したのです。いま考えると笑わずにはいられませんが、その時はてっきり幽霊だと思つたのでした。それもその筈です。家を出る時は白地を着ていたのが、顔から頭からすっかり泥だらけで真黒になつて、顔も何も見分けが付かない程でしたもの、全くどぶ鼠そのままの姿でした。きよは十歳のと一緒に竜巻の時どのかの泥の中へ吹き飛ばされて、出る時もその子の手を引張つてやっと這上つたが、誰も知つた人がないので、私達も死んだものと思つて、死人の中を探しながら来たとのことでした。まあここで始めて私ときよと利男と十歳のと十五歳のと五人揃つたので、一組になつて夫と実の死体を探してみました。なにしろ見渡す限りの死体で、世界中皆こうなつたかと思ひました。それはいくら探しても見付からずにいるとき、電気局の救護班に救われて、その後こちらへ入れて戴きました。全く怖い目に会つたものです。それがいまなら怖い話としても語られますが、あの時は夫も実も近所の人の話によりますと、死体を探すのに一生懸命で、よくあの様な中を平気で歩かれたものだと思ひます。私達が居なくなつてまもなく、家へ歸つて来て、きよと利男の着物を一枚ずつ腰につけ、そのまま被服廠へ入つたそうです。私が荷物に目がくれてそれで死ぬ様な事になつたのだと云いましたら、いえ小母さん、小父さんは決してそんな事はありません、ほんとうに腰へつけたものばかりで逃げて行つた、と云っています。それから大きな木の下で腰を下して「やれ一安心」と一ぶく付けたのを見たが、それから右へ行つ

たか左へ行ったか、見ないとの事ですから、多分死んで仕舞ったのでしよう。いまだに行衛が不明です。殊に秀治の方は柳島の車庫で「己が見ているから、車掌も運転手も早く帰れ」と皆な帰して仕舞って、自分は残って守っていたそうですが、そのうちに人が来て、家も子供もあるのだから帰れ、とすすめられて、それで帰ったのだそうです。帰らなければ助かったかも知れない、と思いますが、やっぱりそうゆう運命でした。今後と申ししましても今迄よそ様に御用達をして置いた金がありますから、取れるだけ取って、それで当座凌ぎに思っています。また私もブラックでも借りて入れれば、今迄の内職でもして、小使取り位にしたいと思えます。まず秀治の従兄の方へでも置いて戴く積りです。

①

救護所に収容された住民には、建物の倒壊や火災の猛威による負傷者と避難の過程で発病した人のほか、以前からの病人および介護中の高齢者も含まれる。神田の出版業田中扇蔵は結核患者であり、古美術商飯田忠五郎は中風を患っていた。英国留学の経歴もある田中の調書はほぼ自筆によると思われる。

調書九 出版業田中扇蔵の証言（大塚臨時救療所）

罹災時の住所 神田区猿樂町二丁目一番地

現住所 小石川区植物園バラック

① 『東京市震災衛生救療誌』三三六―三四〇頁。

図書出版業 田中扇蔵 三六歳。

一、入院年月日 大正十二年十月二十日

二、調査年月日 大正十二年十一月二五日

三、家族の關係 家族二名無事

四、罹災及び避難の状況並びに大塚救療所入院までの経過併せてその感想

感想という程のことも御座いせんが、私の如き痼疾ある者が避難致しました道程と、多少その間の体験を申し上げて、何等かのご参考になりますれば、幸甚でございます。地震火事は昔からの付者とは、かねがね聞いておりましたが、今度はそれを余り現実に見せ付けられたには驚きました。丁度あの時は休日なので、私の家にも隣の弟の家にも一人の頼みになる若い者は居らず、ソレ地震だ、逃げろと云って露地に飛び出したのは、私と今年七二歳になる隻脚の老父と、隣家に住む義妹と幼児、及び十一歳、十五歳の幼年徒手工の都合六人でありました。

然しその時は揺ぎの静まるのを待って、倒壊した家財道具を取片付け様とした刹那、あの強い第二震を食らったので、これは危険と思い、衣類調度に心を引かるる義妹を促し、着のみのまま一行六人十数間の露地を出て、表通りに遁れた時、火は既に南方半丁先に黒煙を揚げ、折からの強風にあおられて延焼してまいりました。然し自分は至極呑気な考えで火煙を眺めながら、消防自動車の来るのを待っておりまして。そのとき一人の交通巡査が来て、最早総ての消火機関は破壊せられ、焼けるに任せるより外ないから、一刻も早く火煙なき方に逃げる様にと、大声叱呼して馳せ去ったので、この時初めて自分は地震火事水道破裂と思いついた時、かねがね祖父母より聞いていた安政大地震の惨話が、ふと脳裡に浮かんだ時は、実に言い知れぬ

恐怖に襲われました。然しその時火はまだ西南に起ったのみでありましたから、ここに一行頼み少なき病人を輸送指揮官として、止んでは起る激しい水平動に肝を冷しながら、北方水道橋際省線電車の土手を目的に落ちのび、ここに暫く息を休めておりますと、雲霞の如く寄せ来る避難者のためたちまち堤上は寸地もなき有様となりました。

この時火勢は益々盛んに仏英和女学校の後を後ろに追って、怒濤の様に荒れ狂ふ焰は、東方駿河台に延焼し、火の粉は盛んに我々の安全地帯を脅かし初めました。そのときふと心付いたのは、土手下にある道路修繕用スチーム、ローラーの側らに多量のアスハルト材料のあった事であります。万一これに一片の火の粉の落ちんか、結果は推して知る可きのみと思い、急ぎ一同の避難者にも知らせ、此処を立ち出でて、一行を連れて水道橋を渡り、橋詰の松平伯邸の邸内へ逃げ込み、此処なれば如何なる強火も襲いはしまいと安心して、背負った子をおろさせ、水等を与えていると、私は極度の昂奮と激動の結果、急に胸苦しさを覚ゆると同時に三百グラム程喀血を致しました。

然しこの場合どうすることもできず、止むなく一椀の水に喉を潤おし、邸内車廻しの植込みの中に仰臥し、煙濛々たる空を眺めて、羅馬の滅亡もかく迄はあるまいと思ひながら、絶えず余震に脅えつつ静臥しておりました。然し此処も我々の為の安住のちではなく、この時猛火は益々勢を得て、対岸一帯三崎町猿樂町駿河台を火の海と化し、余燼は飛んで東は女子高等師範学校や順天堂病院を犯し、西は飯田橋付近より砲兵工廠木工場に延焼し、濛々と黒煙を揚げて肉薄し来る。この時松平邸は三方を火に囲まれ、余すは北方春日町方面の一路なりしのみならず、燃え盛かる対岸水道橋駅の余燼を受けて、邸内の殿中はブスブスと煙り初めたので、それ逃げると、邸の内外数千人の人々は一勢に立って、在郷軍人と警官の注意に依り北方春日町通り

を北に、植物園方面に向って行進を初めましたが、情ないかな私は喀血に次ぐに極度の呼吸困難を起し、一歩も動けぬ次第となったので、否む義妹等を叱咤して、一行を植物園へ行く可く追い遣り、身一つを漸く路上のボギー車に運び、在郷軍人に与えられた氷塊にて胸部を冷し、やや呼吸も整ったので、燃え盛かるニコライの大ドームを後ろに見て、車内を出て三步に咳し五歩に喀し、漸く日落つる項目差す植物園に辿り着きました。この苦しい天路歷程の途上あの心身ともにあの大きなショックを与えられた人々が、少しの喧騒もなく、又一人の交通整理員のあるなくして、完全に左側性を取りつつ、天を覆う黒煙を仰ぎながら、老は幼を労わり、夫は婦を助け、肅々として北行するのを見た時、クオヴァデスの羅馬を落ちる殉教者を思い出して、涙ぐましく程嚴肅な力強さを感じました。これに依って見るも、アドバタイザー紙の称讃の辞も無意味な外交辞令ではない事と思われます。

植物園に避難後は救護班及び在郷軍人の献身的な努力に依って、二日早朝より園内三千に余る避難者が食料飲料共に少しの不自由なく行届いた手当を受けました。これは救護班当局の温かい人間愛の賜は申す迄もない事ですが、一つには園内に都合四箇所潤沢に湧出する掘抜井のあった事も挙げて力ありし事と思考致しました。これにつけても都市衛生上止むを得ずとは申せ、水道のみを頼みて清濁押しなべて掘抜井戸を閉鎖した過去の市制を考えさせられました。

爾來園内の樹間に教室に、またブラックに、風や雨に遇うて数句を過し、病勢益々重態に陥りました時、園内出張の宮内庁派遣の医師先生と方面委員の御尽力に依って、当大塚臨時救療所に入院致しました。もつとも入院致しまする二週間程以前に知人から、大塚にかくかくの病院が出来たから入院しては如何かと進められました。然し私の思つたには、斯様な際には、また震災以来市制事務を半減せられた市役所の御役

人がタイムの消費に困っての飯事だろうと、一種のプロ根性のひがみから大した期待も持っていないでした。処が入院して見て後、自分の悪い想像の全く裏切られていたには驚きました。

参院してのファースト・インプレッションは事務所及び受付に於ける職員方が従来この種の病院にある羽織袴を着た様な繁文褥礼の点は少しもなく、サージの背広にソフトカラーと云ふ様な軽快な執務ぶり、しかも軽率でなく対人格的な態度でありました。更に病室へ行つては対岸の友邦米国より送られた瀟洒なキャンベッドに純白雪の様な数枚の毛布をまとい、床上に心行く迄手足を伸ばした時の嬉しさ有難さは、何と申しても数旬の間一枚五銭の空俵を唯一の寝具として、コオロギの添寝した者のみが知る喜びであろうと思います。またこの院に来て驚きましたのは、我々の病者のために嬉々として何等の倦怠の様子もなく、最善を尽くしておらるる職員の方々が大半は今回の震災に遭遇せられ、罹災者である事で御座います。特に家郷遠く離れて、家は焼かれ調度は失い、知友に離れし年若き看護婦諸氏が職務とは申せ、昼夜をかたず、雄々しき奮闘振りには、唯々感嘆の外はございません。これにつけても贅沢の限りを尽した有産階級の婦女子が浴衣一枚で焼け出され、身を過す術もなくパンのために、闇に咲く花となった人々もある様に新聞で見受けました。然るにこれらの職業婦人は、義務教育を受けてわずかに数年、自ら堂雪の苦を積んで身を守り、世を益するのを見ては、エレン・ケイを論じ、イブセンの原書を解するのみを女子教育のモットーとしつつある現代教育家は何と思われる事でしようか。

以上は私が遭難から救療所までの体験やら感想やらでございます。

以上前後重複と意味の不徹底の所は何とぞ御判読を願います。終りに臨んで御願い申したいのは、側聞しますれば、目下復興院の都市計画審議会に於て一朝有事の際、或いは今回の如き場合に避難民の安全地帯と

する目的を以て公園設置の件について論者が二派に分かれている様に聞き及んでおります。一つは各区に一或いは二箇所の小公園を造り、一つはロンドンに於けるハイドパークの如く都市の中央に数十万坪の大公園を造つて、叙上の目的にそわしめんとする事であります。然しいずれにしても国防、経済、都市の美観と云ふ三大要素を基礎に各専門家が計画する事ですから、我々が批判の限りではありませんが、何卒今回の如き場合に際し総ての交通機関が停止した場合、僅かに数十丁の道を避難するにも小半日の時間を費さねばならず、私共一行の如き老幼病者のある事に一顧を与えて戴きたいのであります。

五、既往症並に現在の疾病状況予後等

大正五年の春、英国リバプール市に参りておる時、突然喀血したから初めて罹患せるを知り、療養を加え滞在三ヶ年にして帰朝しました。爾来絶えず医療を加えるも一進一退病勢依然として変化ありませんから、中野の東京療養所に入院して治療を受け、一ヶ年余にして軽快に赴き退院しました。

それから稼業に従事していました処、かの九月一日の震災により居宅を焼失し、漸く小石川植物園内に避難しました。その間数日の激動によりて病病^あ再び発し、喀血致しましたから巡回救護班の診察を受けました。されど治療数日に亘るも止血せざるために、当大塚救療所に送られ収容せられました。入院治療後数日にして喀血は止まりましたが、胸部の変化は月余の今日に至るも咳嗽^{がいそう}あり発熱ありて、入院当日と変わりません。

病名 肺結核

ちなみに震災における傷病者の脱出としては、リスボン大地震におけるイギリス人貿易商トマス・チェイズの証言が第一に挙げられる。リスボン丘陵部の高層建築上階で衝撃を受けた彼は、脚部の重傷ながら自力で街路へ脱出し、迫る大火のなか座椅子に乗せて沿岸部の王宮広場へ運ばれた。さらに小舟で近郊なる知人のもとへ渡り、しばらく治療を受けたのち故郷のロンドン近郊へ帰還したのである。このとき王立歌劇場で公演中であつたイタリア歌劇団の一行も、遠くマドリッドへ避難し、精神的打撃を受けつつ、航路にてナポリへ帰った。このときスペイン王宮で彼らを激励し、多大の便宜を配したのが、高名なカストラート歌手ファリネリである。②

七九歳の鈴木いんは落下する瓦に埋もれたが救出され、強風にも倒されたが、背負われて救療所へ達した。七四歳の老母を介護し、幼児を連れ添いつつ、転々と避難する牧田一家はとりわけ悲愴である。

調書十 会社員妻鈴木さだの証言（青山臨時救療所）

罹災地 深川区東大工町六二番地

① 『東京市震災衛生救療誌』三〇〇―三〇五頁。

② 拙稿「貿易商チェイズの被災記録」（「リスボン大地震一七五五年―近代ヨーロッパの社会的震撼」online.
拙稿「海神イザベル・ファルネーゼ王妃と奇蹟のカストラート歌手ファリネリ」（同右）online.

職業 浅野セメント会社

入院患者 鈴木さだ（三六歳）

家族 鈴木富吉（四十歳）、裕（十四歳）、正明（十一歳）、泰子（三歳）
（災後病死） 祖母いん（七九歳）

罹災後の状況

あの時私は外で張り物をしていました。夫は勤め先で、泰子と正明は御祖母様と表で遊んでいましたが、泰子が水を飲みたいと云うので、台所へ行こうと敷居をまたいだ時に、あの地震で泰子と御祖母様は梁の下敷になって仕舞い、正明はやっと逃げ出しましたが、瓦の為に生爪をはがして泣き出して仕舞いました。私はあまりの事に驚いて声を出して救いを求めましたが、何もかも夢中で瓦をはがしてやっと小さな穴を開けました。中で祖母が助けて助けてと叫ぶ声がしますので、私は近所の人を引張って来て、やっと出して貰いました。その時は実に実に嬉しそうで御座いました。死んだと思ったのが、傷一つなく出て来たのですもの、なんでも祖母は泰子を抱きかかえて寝ていたのでそうでした。その中に火は直ぐ前のガラス工場から発して、たちまち私の家までつきました。私達は着のみ着のまま、財布を持ち出す暇なく、負ぶったり連れたりして、祇園寺の原へ逃げました。

そこには水が一杯溜っていました。一寸見ている中に今度は東京紡績会社に火が付いて消毒所へ逃げました。此処も大分大勢集って来た頃、また危険になって今度は岩手さんの構内へ逃げました。そこもボンボン家でも破る様な音がして、それが爆弾の音だということで、怖くなって今度は高橋へ逃げることにしました。夫は正明を連れて人混みの中をズンズン進んで行きました。私は足が弱いのでそう進めずにいると、大き

な風で煙に巻かれて、とうとう姿を見失って仕舞いました。仕方なく御祖母さんと子供二人と四人でまた岩手さんの中へ引返して土台石の沢山積んである所に座って、筵を拾って被っていました。その中に竜巻が起こって一家それぞれに吹き飛ばされて仕舞いました。私は子供を探して石と石の間へ入って、キツト抱きしめ一生懸命に祈り上げていました。やっと風が静まったので、顔を上げますと、お祖母さんが見えません。方々探しましたら風の為めに飛ばされて五六間先に胸と手を痛めて倒れていました。直ぐ起こして見てやっているとところへ、前の家の主人が来て、此処も危うい、己が負ってやるから早く逃げ様と言って、直ぐ山の様な処へ上って行きました。

もう此処まで来て、それで死ぬのは運命だから仕方がないとあきらめて、念仏を称えていました。それでもまた思い出して逃げられるだけ逃げ様と、丁度下に蓮池がありましたので、それへ飛びこみましたけれど、水が浅くてとても頼みにならないので、また這い上って靈岸寺の表門が火に遠いからと逃げました。私は前の家の人に「私達の為に死ぬ様な事があっては済まないから早く逃げて下さい」と進めましたが、常から非常に親切な方で、死ぬ時は一緒に行って、終わりまで祖母さんを負い通してくれました。①

調書十一 製造業者牧田岩太郎の証言（青山臨時救療所）

罹災地 本所区若宮町五十番地

① 『東京市震災衛生救療誌』三三一―三三五頁。

職業 メリヤス製造業

入院患者三名 牧田せき（七四歳）牧田岩太郎（三五歳）妻きよ（二五歳）

長女治代（五歳）

（旋風に捲き上げられて生死不明）長男清治（七歳）

（全身火焼に死亡）次女由利子（二歳）

帳場を仕舞って昼飯を食べ勘定を取りに行こうと下へ降りて、家内に昼食の仕度を命じてひと休みしようとする刹那、グラッと烈しい地震に妻は裏へ、私は女の子二人を抱えて表へ飛び出し、角の水道検査所へ行き、近所の人に二人の子を託して家へ引き返して見れば、妻と長男が裏でウロウロしている。「早く表へ出る、危ない」と云う声に、漸く表へ出た。見ると母の姿が見えない。さてはまだ二階に居るのかと狂気のように走せ戻って「御母さん、早く下りなさい、危ういから早く早く」と叫びますと、漸くこわごと降りて来ましたので、引きずるように引張って漸く妻と子供の傍らまで連れて来て、母妻小三人を御飯所公園へ避難させ、私は四つ角で家の様子を見ておりますと、数度の地震に家は前へ傾いて、到底家に這入ることが出来ぬ危険だ。重ちゃんが今のうちに手廻りの物を出そうと云うのを制している中に、地震が幾分小さくなってきたようなので、今の中にといい付き、急いで仏壇と飯櫃と着替えだけを風呂敷に包み、避難の用意をしました。

これよりさき石原方面と吉岡町方面と緑町方面の三方より火起り、石原方面の火の手は飯屋公園に止まり、危険と見て取ったもので、母や妻子を被服廠跡へ避難する様言い付けて引き返して見れば、吉岡町方面のは左程でもないが、緑町方面の火の手は益々盛んにて危険なれば最早止むを得ず、自分も僅か許りの荷物を持

って被服廠跡へ行つた。両側の家の瓦や壁は殆ど落ち尽し、倒れ潰れて見るも悲惨な有様で、避難の人で一杯だし、身の動く様のなく、漸く被服廠に来て見れば、さしもに広い同所も荷物と人でギッシリして、全く足の踏み込む余地もないので、来遅れた人達の中には入れず、僅かの隙を見付けては漸くいざり歩いていました。中へ入って母や妻を探しましたが見当たりません。荷物と荷物との間を縫いながら探したがいないので、さてはまだ此処へ来ていないのかと思ひまして、石原の交番所前電車通りを尻橋の方へ向つて中程の所で出会つたので、連れて被服廠へ来た丁度二時頃と思います。腹が減つて堪らないので、持ち出した飯櫃から御飯を鷲掴みにして食べながら周囲を見渡すと、浅草方面の火の手は川を越えて本所方面へ伸び、国技館方面の火は小泉町両国橋停車場を焼き、更に亀戸電車庫を襲い、一方緑町方面の火は益々勢力を増して南北二葉町より若宮町横川方面へ猛進し、一方緑町より亀沢町一丁目二丁目へ向かい、被服廠は全く三方火に囲まれ、煙は天を覆いて暗黒の世界となつた。もう到底此処は危険と見て取つたので、もつと安全な場所へ避難し様と、両国橋の方が僅に明るく、遙か彼方に薄く煙を見る許りなので、一時両国橋へ向おうとした。その刹那あの恐ろしい旋風が起つて吹き飛ばされ、もう荷物どころか身だけ切り抜けねばと、仏様も何もかもそこへ捨てて、老婆は二つになる子を手早く背負い、妻に長女を負わせ自分は長男の手を曳いて、漸く原の中程まで来た時、また旋風が来て目的の処へ出ることが出来ず、大きな楓の蔭に皆一緒に身を潜めているので、処きらず皆の身体に降りかかるので、生きた空はありませんでした。その中にどこからともなく空馬車が走つて来て、自分等の側に止まりました。馬は車が動かなくなつたので頻りに足かき、私は後頭部を蹴られましたので、いまここで馬に殺されては大変と思つた時、長男も馬に驚いて立ち上つた瞬間、またもや

吹き来る旋風にサッととさらわれて、四五間先に吹き飛ばされました。その上に四五人も人がおつかぶさつて来ました。大変だと思つて、飛び起きて見たとき長男の姿はありません。マゴマゴしていると自分まで死すので、逃げるだけ逃げようと風と火の渦巻く中を、念仏を唱えながら彼方へ吹き倒された。漸く巡査宿所まで逃げて来れば、上から大きな石の様なものが落ちて来て、頭の真中へ当つたのでグラグラとしたが、このままここへ倒れたら後から来る人に踏み殺されて仕舞うと、漸く足踏み締めて駆けながら、血を沢山流しては腹のためにも身のためにも行くにも、長い布が落ちていたのでそれを拾つてグルグル巻き付け、安田邸の庭まで駆け付けたが、猶も襲い来る火煙に苦しくて堪えられず、大地に打ち伏してこれが最後かと思つているうちに風が風ましましたので、この時逃げねばと跳ね起きて安田邸の後ろ路を御蔵橋の袂まで逃げました。この時はすでに太陽は没し、対岸の浅草方面は火の海と化し、その煙が本所の岸に吹き付けて呼吸も苦しく、咽喉は渇く腹は減る、もう一步も進まなくなつたので、河岸の鉄棚を越えて川に入り、川水を二三杯手に掬つて飲み、そこへ流れて来た生大根をかじつて漸く僅に腹を充す事が出来た。

対岸の浅草蔵前電気会社煙草専売局高等工業学校等の建物が盛んに燃えていて、その煙が川を越えて此方へ吹き付ける熱さと煙にむせ、そのうえ頭の傷が痛むので、今にも死ぬかと思ひながら大地に仰向けに寝てみると、今自分が通つて来た横町の家々が、停車場を焼き尽くした焰の為に忽ち呑み尽くされて仕舞つた。遂に前後不覚になつて私は伏して仕舞つた。咽喉が渇いて堪らぬので、起き上つて河岸にぶらぶら来ると、道路散水ポンプの人ばかりがしているので自分もそれを飲み、安田邸の前まで来て川を見ると、船が二艘浮かんで大勢の人がいたので、家族のものどものことを案じながら置いて貰つている中に、同乗の一人が被服廠へ行こうと云うので、暗いながらも探してみようと同所へ行き、大声で母や妻子の名を呼びながら尋ねた

が返事もなく、さては自分一人生き残ったかと、家族の者を見殺しにした様な気がして悲しかったが、仕方もないので船に帰って一夜を明かした。

二日の朝まだ夜も明け切らぬ中から人々は、互に名を呼び合いながら河岸を通るので、自分も船から上がり、停車場の方へ行ってみると、構内の前の交番の所に砂糖一俵、横から切って各自が勝手に持って行くので、自分も紙へ少し入れて持ち、千葉県方面へ行かないと食料がないと言われたので、ひとまず千葉へ行こうと思ったが、今一度被服廠跡を探ねて見ようと足を踏み入れると、昨日の魔の風魔の火の為に開いて破れて降伏せる人の死体累々と横わり、身体はふくれ傷からはタラタラと血を流し、苦悶のままに死せる者、辛じて私を免れたる人は、衣服は破れ血を浴びたまま連れの名を呼びながら河岸へ引き揚げて行く。重傷で動けぬ人は知人が尋ね来るを待ちつつうめき苦しんでいるが、尋ね探された人は幸いです。紅蓮の焰大旋風焦熱地獄から漸く逃れ出ても、誰一人看護する人も一掬の水を飲ませてやる人さえもなく、重傷のままに死んで行かねばならぬ人達。悲惨！残酷！ありだけの言葉を並べ連ねても、これよりむごたらしい事はありますまい。家族のものは死んで仕舞ったと覚悟はしましたが、図らずも昨日自分達へ走って来た馬車が、累々たる死体の中に馬も車も無事にぼつねんと立っているのを見ましたので、それに力を得て駈けて行って見ますと、妻が末子を背負って立っていました。嬉しや、さては生きていてくれたかと、近寄って見ますと、母も長女も助かっていました。その嬉しさ！親子五人抱き合って、暫くは嬉し泣きに泣いて仕舞いました。母は右臀部の丸さ三分、長さ三寸位の木の折れたのが貫通し、左臀部は一寸丸位の肉が削け、右膝頭一面火傷し、左膝三寸下に幅八部長さ二寸深さ二分位に肉が削け、右腕に打撲傷を負いてぶらぶらとなった程の重傷。妻は右眼の上に打撲傷を負いて紫色に腫れあがり、長女は右足に打撲傷、身体各処に火傷かすり傷。末女は顔一面

砂にまみれて両手足に大火傷、殊に両股より下腹部に大火傷を受けたが、命に別状のないのが幸いでした。

母が水が呑みたいと云いますので、付近の氷庫から一尺四方位の氷塊を持って来て、母や妻子や付近の人々に分け、さてこれから千葉へ避難しようと、母をタイヤの焼けたリーヤカーにのせ、妻に末子を背負わせ、私が長女を負って、長男の生死も判らぬ被服廠も屍の間をぬけて、河岸に出て撒水の水を飲み、右を番場通りと荒井町を越えて、左に北新町右に若宮町間にある割下水公設市場跡を過ぎて、我家のあった方を偲びつつ三ノ橋に出て、墨田局前から左へ半ば焼け落ちた報恩寺橋を渡り、太平町通りを精工舎手前まで来ました時、三階石造の銀行の棟にまで余焰が盛んなので、前を通り過ぎられず、他の道を行こうとしても道がありません。途方に暮れていたら、顔見知りの人が七八人来て、私達の困っているのを見て大変同情して、大勢で安全な所へ連れて行ってくれ、天神橋を渡り亀戸小学校の救護所へ連れて行ってくれました。この人達に会わなければ、私達はどんなに苦勞したか判りません。重傷の母は連れていきますし、家内も私も子供を背負っていますし、昨日からの疲勞と空腹と、その上私もまた傷をうけておりますので、全く無事に亀戸まで行かれましたのはこの方々のお蔭でした。校内にはもう収容された人も随分ありまして、重傷者の呻き苦しむ声。輕傷者は飢えと疲勞と恐怖の面持で牛乳や握飯をむさぼり食う様はまるで餓鬼道です。私達も矢張りそんな浅ましい様子で御飯を頂いたのです。漸く表門へ廻って、傷の応急手当を受けるのを待っていました。その間に数回の地震があり、その度に恐々として早く治療して下されば、とそれ許りを願っていましたが、負傷した人が多いのでなかなか番に当たりません。漸く母から順々に治療を受けまして、ほっとしますと妻や子供の様子があまり見苦しいので、表通りで僅かの所持金のなかからシャツを三枚買いまして、母は到底着替えさせられませんし、私はどうでもいいと思ひまして、妻子三人に着せました。

その時はもう午後の三時頃でしたらう。早く千葉方面へ行かなければと、其処から亀戸停留所へ行き、構内に市川、船橋、津田沼の三箇所には救療所があると云う掲示を見まして、津田沼へ行こうと乗降口へ廻ってみますと、構内は避難する人で全く爪たてる余地ありません。我れ勝ちに乗車する人の背には蒲団手荷物或いは小児や傷者を背負い、狭い乗降口にひしめけば、苦しい苦しいと小児の泣き声、連れを呼ぶ声がうち混じて物凄い有様でした。重傷者の女子供を連れては到底乗られません。止むなく二列車待ちまして漸く乗りましたが、続々と這入り込むので、苦しくて堪らず、後部の車掌台にヤットひとかたまりになっておりました。こうして恐怖と苦悶と不安と焦燥にうちそよぎて、被服廠で見失った長男に心を残して亀戸を出しました。

中山へ来た時は全く太陽が没して車内は人の顔も見えません。汽車が揺れても、地震ではないか、覆りはせぬかと、不安の心を抱きつつ津田沼へ着きました。漸く燈火を見て安心し、私は母を負うて降り、妻は末の子を長女は……。津田沼消防隊が続々降りる避難者をそれぞれ収容所へ連れてってくれました。私達は重傷者のうちとして担架に母を乗せて貰い、町役人が提灯を持って先に立ち、五六人の人に護られて妻や子供と続いて鉄道聯際の機関庫に収容されました。此処には先着の避難負傷者を沢山収容して、習志野衛戍病院から軍医や看護卒が出張して救療に務めていました。私達の負傷の経過を聞き、明日治療する旨申渡されて、コンクリートの上に藁を厚く敷き、その上に毛布を敷いて漸く二日一晚振りでゆっくり横になる事ができました。

三日すなわち津田沼へ着きました翌日、母は重傷の故に習志野衛戍病院へ収容され、私達親子は同所で治療を受けていましたが、末子が火傷の経過面白くなく、日増しに衰弱し行き、遂に一週間目の八日午前二時

に死亡しました。年の割合に重い災難でしたから致方ありません。軍隊の証明を得、津田沼役場で火葬の手続、認可証を得て無料で執行して貰いました。

津田沼へきておよそ一週間位を経た頃、同じ避難者の中に新聞を購て来た人があったもので、それを借りて見て、始めて東京市の焼失せる区域の意外に広く、死傷者の数の多く、交通機関の不能電信電話の不通という事を知りました。家の焼跡も見、親類の安否も知りたいと思いましたが、東京へ行くには役所の証明と米五升その他の食料を持たなければならないと云うので、到底行く事が出来ません。解禁の日を待つより他ないと思いましたが、十二三日頃団体なら前記の食料等なしでもよいという話なので、その日の午前七時頃出京する団体のあるのを聞いて、治療を受け朝飯を食べて九時の列車で津田沼から東上しました。

亀戸で下車して錦糸町より江東橋を渡り、三つ目通りから我が家の跡へ来て見ますと、何処が我が家か判らぬ様に一面の焼野原と化し、漸く焼け残っていた営業用機械によって我が家を知りました。見れば親戚から安否を氣遣って見舞に來たと見えまして、手紙や書置きが沢山ありましたので、その避難所へ尋ねて行きましたら、大変喜びまして、焼跡へ行って見たが、立退き先が判らない為安否の尋ね様もないので、被服廠で一家皆死したのだらうから十三日迄に見当なかったら、被服廠跡へ行って骨を貰って回向しようと思つて居たと言っていました。その時はもう路傍に牛めし、うどん、おでん、牛乳、ゆであづき、清酒、すいとん等を売る店がありまして、しきりに客を呼んでいました。もう飢えるような事はあるまいと思ひ、その夜は親戚に泊まって翌日津田沼へ帰りました。津田沼でも度々余震におびやかされました。昼は沢山の人に氣が紛れています、夜になって少しでもガタガタすると、煉瓦崩れはしないかと、不安で堪りませんでした。九月十六日午後三時頃収容者全部は数台の自動車で習志野津田庁舎へ送られました。津田沼にはおよそ百人

程も収容されましたが、全治した者や地方の親戚を頼って引き取った者等ありまして、習志野へ行きまし
た者は二十数名でした。

母が衛戍病院に入院しましたから、二三日経って行ってみましたら大変喜びました。傷の経過も良好で、
余病併発なくば治癒疑いなしと云うので安心しました。度々見舞って安心させたいのですが、何分習志野ま
で一里もあるので、なかなか毎日行かれませんでした。

高津西庁舎へ収容されてからは建物は木造平屋ですが、棟低く周囲に支柱がしてありますので、地震は度
々ありますが、もう不安も恐怖もなく、既に収容された人と暮らしている中に、方々から衣類雑貨等の慰問
品を頂いて大変有り難く思いました。広い野原に東西各処に十数棟の廠舎の中東廠舎に鮮人支那人数人を収
容し、西廠舎に日本人千四人を収容し、善通寺師団の看護班が各傷者の治療に務められていたが、その班が
解除するに当り、交代の班の手当を受けるか、或いは東京市の救療所へ入院するか二つは熟考の上返事を
せよとの事に、上野の救療所への三四十名善通寺救護の付添いで送られたが、自分は母の入院せる衛戍病院
で他へ患者を移す時一緒の所へ行こうと思ひ、その一行に加わらず、九月二四日は衛戍病院の患者が東京へ
移送される時、この一行に入れて貰ひ、津田沼駅より錦糸町停車場へ送られ、それより自動車で上野へ送ら
れると思つたのに道が違ふので、看護婦に聞くと青山学院へ送られるという事でした。そして同所の中部
寄宿舎へ収容されました。

そこへ来ましてから度々地震に襲われ、一度などはあまり強く夜十時頃庭へ飛び下りたことさえあり
ました。室内は九月一日の大震災に壁は落ちたり、亀裂を生じたり、破壊した処等生々しき記念があるので、
不安で堪りませんでした。

この頃から前途の方策に就いて種々考えましたが、なにぶん着のみ着のまにて避難してからは、各処よ
り贈られた慰問品よりなく、従前の仕事をしなくとも先立つ金はない。自分でバラックを建てる資力もなく、
市のバラックに這入っても、寒さに向かうのに夜具一組もないので、一日も早く生活の道を立てたいのです
が、全く途方に暮れています。九月二十七八日頃に宮様お手縫の衣類を頂き、また二九日の午前十一時には
畏くも皇后陛下より御慰問を賜り、患者一同有難涙にむせびました。

十月十三日青山学院授業開始につき、付添なき者は築地の聖路加病院へ、習志野から送られし者は大部分
大塚の養育院跡へ、自分達親子四人は青山救療所へ送られました。

①

これらの証言を収録する『東京市震災衛生救療誌』は、一九二五年東京市衛生課によつて編纂され、三五〇頁
の大冊として刊行された。構成の主体は震災時の衛生・救療に関して諸項目を列記し、事項の概要や統計的な総
括を記述したものであつて、医師と看護婦の回想は僅か含まれるものの、個別の事項や治療の説明は稀薄である。
そうしたなかで救療所に於ける調書二一例は、「入院患者の主なる罹災状況」として巻末の第五章第二節に一括
して置かれた。こうした書物全体の性格と構成上の位置づけによつて、これら傷病者・産婦・高齢者の証言が内
容の独自性と豊かさにも拘わらず、震災記録としてとりわけ注目されることはなかった。

初出 二〇二三年十二月十一日